

遥か向こうの空の彼方から

少しだけ冷たい空気
少しだけやさしい空気

遥か向こうの空の彼方から
季節変わる風がやってきた
夏の名残 密かに抱え
街をそっと撫でる

気づいた時 もうそこには
楽しい日々 置き去りにされ
誰かを呼ぶのでなく
何かを忘れたまま

季節のこの扉をたたき
その風ただ通り過ぎる
これから訪れる
秋の気配が

少しだけ冷たい空気
少しだけやさしい空気

人々の影 細く揺らして
どこか遠い記憶運んで来る
夕暮れひとしづく混ぜたような
輝きまぶたの裏に

気づいた時 もうそこには
この心だけ 置き去りにされ
誰かを探すのでなく
何かをなくしたまま

この季節の扉をたたき
ただその風は通り過ぎる
秋の始まりを
そっと受け止める

少しだけ冷たい空気
少しだけやさしい空気

中秋の月

過ぎてゆく季節の
痛み感じて
そっと撫でる手のように
やさしく照らす

風のない空気まとして
月はゆっくりと満たされて
薄い雲一筋
レース越しのように

どこか遠い昔の日々の
気配含んでいるような月が
あの頃にできなかったことを
そっと集めて教えてくれる

こんなにも暖かく
怖いほど眩しくて

過ぎてゆく季節の
痛み感じて
そっと撫でる手のように
やさしく照らす

道端のススキ 光受けて
銀の羽を開き
その影までもやさしく
揺らす風と共に

どこか遠い昔の日々の
気配含んでいるような月が
あの頃に言えなかったことを
そっと集めて慰めてくれる

こんなにも暖かく
怖いほど眩しくて

千変万化

目の前に起きることとめどなくて
移ろいゆく慌ただしさの中には
良いこと 悪いこと
おきまりごと 突然のこと
新しいニュースにつぎつぎと消えてゆく

その中でくっきりと飛び込んでくる
テレビに映る関わる人たちの顔
それ見ながら感じるエアコンの涼しい風
その時の時間をゆっくりと震わせる

夕方の陽射し
部屋の隅薄い光を落とし
くつろぎの中で
自分の今日の日を忘れる

ようやく自分のかたち取り戻す
消えるものと残るもののあいだで
この心いつも小さな揺らぎ抱え
立ち止まる時間の大切さを思う

変わる速さに追いつけないでいても
見つめる気持ちは確かにここに残して

やがて来る夜
天井のあかり強くなって
くつろぎの中で
自分の今日の日が終わってゆく

素直にいえなくて

ただ素直に「ありがとう」とだけ
いうことでよかったはずなのになぜか
ただ照れくさかっただけでいえない

何気なくみえる親切に
お礼言うほどのことでないと
なぜか勝手に決めつけて
間違っていたことに気付く

お礼はなくていい
というのを決めるのは相手
こちらが勝手に
決めるのはいけないこと

ただ素直に「ごめんなさい」とだけ
いうことでよかったはずなのになぜか
ただ照れくさかっただけでいえない

ふとかけてしまう迷惑に
お詫び言うほどのことでないと
なぜか勝手に決めつけて
間違っていたことに気付く

お詫びはなくていい
というのを決めるのは相手
こちらが勝手に
決めるのはいけないこと

月の世界

いとけうらに老いもせずなん
思うこともなくはべるなり
誰もが憧れる 世界には違いない

死なずに死ねずに
悩むこともなく
永遠に生きる
ことできるのかな

終わりがあから人は頑張れる
頑張ることから悩み生まれる
清らかなままで老いることもなく
生きていたいのはそうだけど

いとおし悲しと
おぼしつこともうせぬ
全てを消し去って くれる天のはごろも

恨みや妬みが
なくなる代わりに
執着や愛も
生まれないのかな

愛があるから人は頑張れる
頑張り終えたら次の苦しみ
怒ることなく悲しむことなく
生きていたいのはそうだけど

いとけうらに老いもせずなん
思うこともなくはべるなり
誰もが憧れる 世界には違いない

思い出は胸の中に

少し長くなってきた夕方の影に
記憶までも冷やす季節の終わり

いつの間にか途切れた笑いの中で
思い出胸の中にそっとしまっ

まぶしい夏 この日の光
心の奥のどこか 貼り付いたまま

風はどこか冷たく袖を撫でてゆく
蒸れた匂いなくなる季節の終わり

夕暮れの空どこかさみしい色をして
その下を歩いて刻む足音

その静けさ 胸の痛みも
心の奥のどこか 貼り付いたまま

愁

秋の心は愁と読むけど

風が袖口滑り落ちてく
その冷たさに触れるたびに
ふいに誰かの手の温もりを
思い出しては目を閉じる

一つ二つ灯る街灯
胸の奥の空さ
名前呼ぶほど強くないけど
ただそばにいてほしい

秋の心は愁と読むけど

夕暮れの色濃くなった頃
人恋しさが宿ってくる
遠く聞こえる電車の音が
夜に向かって伸びてく

その響きの中探してしまう
帰ってくるはずない足音
秋の空気は寄り添ってくる
寂しさ隠そうとするたび

そして気づけば蘇ってくる
肩越しの誰かの笑い声
人恋しさは孤独の影が
伸びる時にやってくる

秋の心は愁と読むけど